

# 沖

俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

# お汐井

能村 研三

## 博多山笠

今年の九州大会は六月三十日に玄界支部のお世話により福岡市で開催された。ちよつど玄界支部の支部発足十周年を兼ねて行われた大会で、長崎、大分さらには東京からも応援部隊が駆け付け盛況な大会となった。

半夏雨旅の小銭はかさばりし  
美しき橋万の鉄鋌灼けつくす

筆吊りに穂を休ませし梅雨晴間

ごず降りてふ音凄まじき男梅雨

玄界支部では、梅村支部長、大川ゆかりさん達が綿密な計画をしていただき、日程も大会の翌日が「博多山笠」の初日であることから、七月一日の吟行も博多山笠に因んだ場所を選び、地元ボランティアによる詳しい解説までしていただいた。  
この日は祭り初日なので、昇き山笠のそれぞれの流区域を清める行事が行われていて、町の角々に笹竹を立て、注連縄を張り、竹で作った御幣が添えられた。  
町中を歩いている男たちもこの日は長法被と言われるものを着て、足は雪駄か下駄。祭の期間中はこれが正装で冠婚葬祭やホテルでも出入りは自由であると言う。

青竹を伐らずにをりし祭まで

発想の枯れ尽くしたる端居かな

折角の白服なれど忙しすぎ

紗恵に次男「拓海」誕生

朝風の海を拓きて未来あり

櫛田神社で誕生を聞く

お汐井の真砂を貰ふ祝ぎ心

昇き縄は男の汗の誉れかな

この祭は博多総鎮守である櫛田神社の神事でもあり、境内には飾り山笠も安置されていた。神社の神紋は「織田瓜」と呼ばれるもので織田信長の家紋で、我が能村家の家紋でもあるので、とても親しく感じた。この門が胡瓜の断面に似ていることから、祭の期間中は博多の人は胡瓜を口にしない「胡瓜断ち」をするそうだ。

ちょうど我々一行が櫛田神社に参拝しようと神殿の前に並んでいた時に、携帯のメールに良い知らせが入った。三女の紗恵に次男が誕生したという知らせである。

勇壮な男の祭である「博多山笠」の初日の日に、しかも櫛田神社に参拝しようとしている矢先のことであつたので、何か深い良縁を感じた。この嬉しい知らせに、感謝する気持から、二人目の孫のために、この祭で使う箱崎浜から採った汐井（真砂）が小さな竹籠に入つたものを買った。

能村 研三

# 蒼茫集



兜 虫

広 渡 敬 雄

電過ぎしあとの明るさ修司の忌  
駅弁は筍づくし身延線  
いちはやく樹々に闇来る螢狩  
萍や小学校は城の跡  
からだより魂去りぬ滝の前  
兜虫ふるさと既に詩のごとし

かのやうに

辻 直 美

かのやうに地球は浮かぶ石鹼玉  
夕景の日も月も入れ田植終ふ  
川越や小田の蛙の鳴くことよ  
野放図な子雀もゐて可愛らし  
額の花微笑むたびの糸切り歯  
書き順を子に教はりて星祭

われは母か

荒井千佐代

山彦のよく返る日よ柏餅  
袋掛け濁りし川に潮差し来  
沖よりの雨の近づくアマリリス  
昇天祭湾の真中に砂洲生れて  
薔薇の坂神父さまより三步あと  
われは母か女か妻か風の麦

浅草六区

吉田政江

忘れたきことに火が付き泥鰯鍋  
雷神の集まつて来る雅塔  
明易き浅草六区見ゆる宿  
朱柱の色町名残り新樹光  
焼け銀杏と呼ばれてゐしが若葉なり  
五百段磴のぼり来て雲の峰

ほととぎす

酒本八重

崩るるも積みぬ晩年ほととぎす  
若き日に会ひたかつたね時計草  
扇風機むかし話は美化されて  
民生委員立ち寄る家や簾吊る  
いま掴むもの欲し虹の淡すぎし  
水無月の水豊かなる此処むさし

朴の花

高橋あさの

朴の花仰ぐこころの直ぐなるよ  
木馬館は薫風公演旗ゆれて  
江戸切子矢来の技とふ深きかな  
競ふより和す花多し梅雨に入る  
棒のごと一級河川置く夏野  
夏霧の流れに山気ひそみをり

夏暁の塔

菅谷たけし

足場板積まれて三社祭名残り  
繋がらぬ六区の記憶みなみ風

改めて黙禱五〇〇号の夏  
小満や中天点すタワ一の灯  
夏暁の塔ジャックの豆の木の高み  
どぜう屋に祝賀余熱の顔残り

夏霞

大畑善昭

東京スカイツリーとは夏霞食ふ処  
浅草に土地感少し燕飛ぶ  
深川の泥鰯鍋とはたまらぬよ  
隅田川下りに青葉潮の香も  
金環日蝕青がへるは鉢に  
部分月蝕さつきから夜鷹鳴き

リズム

武藤嘉子

田の堰のリズム整ふ卯月かな  
朝涼し風と水おと交叉して  
薫風やいろはにほへとわがひと世  
江戸切子匠の心ここにあり  
つまみ簪ゆれて人情涼しかり  
青春も昭和でをはり花うつぎ

術 後 遠藤真砂明

まんばうに春の太平洋日和  
綱引の汗のつつぱり組が勝  
一列に真つ正直に葱坊主  
トライアスロン獣走りに汗散らす  
青葉して術後の天地瑞々し  
強がりのあと沈黙の雲の峰

桐の花 北川英子

桐の花五百号てふ高みかな  
衣ずれの音も透明海月浮く  
ルーキーの緑風となる好走壘  
船虫の進退にふと戦時中  
通夜道や夕虹色のレクイエム  
病む夫に励まされをり麦の秋

二人太郎 千田百里

生き生きと生きむ五月の木のやうに  
禽たちも噓せをり栗の花日和  
十葉の喝采バイオ研究所  
ごきぶりを打つに善人面は無理

万太郎・松太郎句碑

祭あと二人太郎の碑の寧し  
桜桃忌夫とは別に雨宿り

涼 し 辻美奈子

尖塔をともしびとして春の逝く  
下町のおくたれ口も夏めくよ  
新塔は切子光りや橋涼み  
金網屋よりスカイツリーを見て涼し  
ロック座の小町涼しく老いけらし  
青嵐や鋼を塔に編み上げて

隈取り 久染康子

幟立つ青き山河を従へて  
青葉潮蹴立て更なる沖目ざす  
葉桜の隈取り太し隅田川  
尖塔は堂の簪薄暑光  
スカイツリーを支点に虹の弥次郎兵衛  
首手拭して緑蔭の車夫溜り

竹の傘 宮内とし子

両隣ビルにならうと種物屋  
若葉風古地図にもある計りごと  
蔦茂る浅草語る裏通り

新塔の青き火照りに明易し  
巻貝の中は真つ白夏来る  
梅雨きざす竹人形に竹の傘

飛行機雲

鈴木良戈

スカイツリー飛行機雲と夕焼けぬ  
日食や軽鳴親子乱れずに  
天帝へ捧ぐ泰山木の花  
木場堀は風の抜け道青時雨  
いま消えし医院の灯五月闇  
遠き日を透かして見たる芥子の花

鬱 勃

上谷昌憲

鬱勃の闇のゆらぎを墓  
三四郎池の濁りも梅雨の底  
金環蝕青柿落ちて弾みけり  
川を背に補欠の並ぶ行々子  
麦湯飲む沈黙の距離測りつつ  
下町の尖端は雲夏つばめ

更 衣

河口仁志

補聴器を外し祭の街に出る  
濠端の其処は暗がり実梅落つ

浮雲の移る間のあり更衣  
忘れぬし土の匂ひや野韭摘む  
百足虫這ふどこか足枷あるやうな  
朝もやの中の搾乳遠郭公

卯の花月

溯上千津

スカイツリーに古塔の匠活きて朱夏  
恩寵の天寿や卯月香ぐはしき  
一日の気力賜る夏の露  
柔翅の透く蝶か蛾か岐路に舞ふ  
青葉照投げ込み寺にツアーバス  
予報より体感信じ梅雨籠

瞳

湯橋喜美

街薄暑未踏の塔に身を反らす  
放たれてすぐ群に入る草金魚  
西瓜食ぶ嬰抜けの瞳を大きくし  
重装備解かず憩へる登山帽  
捨て車か否か十薬とり囲む  
蛇苺後ずさりしてこれなあに

# 潮鳴集

深みどり

林昭太郎

老舗みなビルに収まり燕来る  
麦秋や切手の王妃ひだり向き  
母の日と書く黒板の深みどり  
朧夜のスカイツリーに心柱  
胡瓜湾曲月のうしろに日が隠れ

千号へ

大森春子

アイロンをかけて春愁平らにす  
卵白の泡立ちあがる復活祭  
千号へ踏み出す一步風五月  
モガモボの浅草六区薄暑光  
淡島さまへ針を持たざる夏帽子

ひと洗ひ

甲州千草

昂揚の新塔夕立ひと洗ひ  
夕立晴心気に江戸の発条貫ふ  
十葉ののびのびビジネス街の裏  
夏帽子ハイジの駆ける野の欲しき  
鳥ごえの甘酢つぼくて合歓の花

ハッピーエンド

栗原公子

タツチして抜ける改札はしり梅雨  
濃あぢさゐ昨夜のなごりの潦  
夏めくや霧状に噴く化粧水  
空つぽな心に黴の浸食す  
梅雨ごもりハッピーエンドの本そろへ



# 沖作品



# 能村研三選

夏つばめ木綿のシャツに風抜けて  
沖めざすヨットは白帆耀かせ  
芽吹急メタセコシアの二色刷り  
背泳の切りゆくしづき翼なす  
六月来上より生ゆる嬰の齒よ  
雀の子米食はぬ日の小家族  
雲雀ひばり走れば風が泪ふき  
菖蒲湯や明日も使ふこの手足  
花は葉にほろびし邸の避雷針  
五月来る村一線に水満てり  
結論は方向転換黒ビール  
踏み出せる五百一步目柚子の花  
蕉門を語るや句碑のかたつむり  
堀川に逆さ新塔業平忌  
浅草や風鈴売に声かけて

(伊能忠敬記念館)

千葉  
市川

町山 公孝

城

岡澤 田鶴

千葉

深川 峰子

祭あと錠前太き神輿庫  
自由とは丈まぢまぢに姫女苑  
奥津城へ野あざみの紅刈り残す  
「活動」と映画よぶ祖父パナマ帽  
和の色と思ふ風透く立葵  
父の手の土にまみれし穀雨かな  
葉ざくらや母はかの世も黒髪か  
二世帯の住みて二階の鯉のぼり  
緑蔭を広げて古社の大銀杏  
店先の切子ガラスに日の光  
接戦の末の勝利や風薫る  
子午線の夢の軌跡や夏館  
万緑や更なる明日へ五百号  
スカイツリーすつくと粋の灯涼し  
病み抜けて華髪身に添ふ更衣

千葉  
豊多野(豊多野町)  
座古

座古 稔子

東京

磯貝 尚孝

千葉

荒井千瑳子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

夏つばめ木綿のシャツに風抜けて 深川 峰子

夏と言えば、やっぱり木綿のシャツが良い。サラツとしていて良く汗を吸ってくれ、肌触りも優しい。近年はクールビズとしていろいろな涼しい素材のものが増えてきたが、一時代前までは、木綿が主流であった。季語の夏つばめからは軽快で澆刺さが伝わってきて、季語の斡旋も成功した。下五の「風抜けて」が木綿のシャツの通気性と夏つばめの軽快な動きの両方を引き立てている。

雲雀ひばり走れば風が泪ふき 岡澤 田鶴

漱石の『草枕』のなかで、「落ちる雲雀と、上る雲雀が十字にすれ違ふのかと思つた」とひばりの動きを描写したあと、シェリーのひばりの詩を原文で引用しているが、この句は、走っているのは「ひばり」なのか、「人間」なのかいろいろ解釈が出来るが、「風が泪ふき」と表現した作者の詩的な高揚はすば

らしい。空高く飛翔し、美しいさえずりを低く高く歌い続ける雲雀だからこそ湧いたイメージなのかも知れない。

結論は 方向 転換 黒ビール 町山 公孝

酒の席で物事を決めることを嫌う人もおられるが、少しアルコールが入ると人間の発想力が豊かになり、新しいアイデアが次々に生まれる。ある程度の方向性が決まっていた事柄で最初は普通のビールで乾杯されたのかも知れない。しかし飲んでいううちにその方向性が次第に変わってきてしまい、結論は方向転換ということになった。双方が納得の上今度は黒ビールで改めて乾杯することとなった。

祭 あと 錠 前 太 き 神 輿 庫 荒井千瑠子

先日の五百号大会の吟行会での句。浅草寺の隣にある浅草神社は、三社祭を主催する神社で当日使われる神輿が境内の神輿庫に安置されている。私たちが訪れた時は三社祭が終ったばかりの時で、祭の櫓が解体されたものや提灯などが境内に置かれていた。また来年の祭まで静かにここで眠ることになる。神輿庫の錠前はしっかりとかけられていた。

父の手の土にまみれし穀雨かな 磯貝 尚孝

二十四節季の穀雨は「草木は甘雨に煙り、稲作農家は苗つくりや田おこしに励む。この時期のお湿りは万物生の異名通り、生きとし生けるものに精気を満たしてくれる」とある。農業用水に水が満ち満ち、田植が始まる頃。作者は今では俳人として

「穀雨」を季節として感じるであろうが、その言葉を聞くと昔農業を営んでいた父の姿を思い出した。父親は土まみれの節くれた手で自分を育ててくれた。

(以下略)